

IV-61

津軽ダム建設に伴う情報公開と地域合意形成について

建設省 津軽ダム工事事務所 正会員 ○岩渕 伸哉
船木 純孝
奈良岡敏弘

1. はじめに

近年、公共事業をとりまく社会情勢は大きく変化しており、中でもダム建設事業については、説明不足に起因する誤解等もあって国民の不満・不信感が高まり「無駄な事業（投資）」との批判の声も聞かれ、ダム事業のあるべき姿が問われている。こうしたことから、ダム事業そのものを国民に理解できるよう再評価する必要があり、それと共に上下流域の人たちのダム建設に対する合意をいかに取り付けるかが重要視されているところである。そのためには、我々（官側）が「なぜこの事業が必要なのか」「今、何をしているのか」等、迅速かつ信頼性のある情報の積極的な公開が強く望まれているところである。

ー津軽ダムがすべきことー

津軽ダムは、現在の目屋ダム（県管理）の再開発ダムとして昭和63年度に実施調査着手以来、既に10年の歳月が経過しているが、依然として、ダム建設の必要性に対する理解が一部の人たちに限られていること、マスコミ報道も含めダム（ダム管理など）に対しての誤解を抱いている人が多数いるのが実状であった。また、当ダム建設に伴い移転を余儀なくされる方々にしても、「なぜ自分たちが二度に渡る移転が必要なのか」等について十分な説明がなされてなかったとの反省がある。

津軽ダムでは、これらの問題を解決し、地域と一体となった事業推進のために、本事業の定期的な情報公開を行い、地域住民の声を聞き、合意形成を図る事を目的として、①「津軽の水」公開討論会を実施するとともに、②ダム事業説明用冊子の作成により広報・説明活動等を展開してきた。

その手法として、討論会については、岩木川の水（河川・ダム事業）に対する思いを聞くために地域住民、関係機関を中心とした話し合いの場を設け、説明用冊子の利用については、地域住民、関係機関、マスコミ等に対して職員が直接足を運んでの説明会（直接対話）を幾度となく実施してきた。これらの取り組みは、職員自らが企画・構成するなど、すべて手づくりによって実施している。

その結果として、ダム建設に関する理解と誤解の解明について、徐々にではあるが良い方向へむかっているとの感触を得ている。また、足を運んでの説明会は、ダム建設への合意形成を図ることに役立つと共に、当ダム事務所組織への信頼をも得る事が出来たと確信している。

本報告では、情報公開を利用したダム建設における、地域の合意形成のために行った一手法について報告するものである。

2. 津軽ダムのこれまでの取り組み

第1Step：地域住民の声

→ 河川・ダム事業に対する意見 — 「津軽の水」公開討論会 —

津軽の母「岩木川」流域の現状を認識し、暮らしにかけがえのない水について考え、これからの地域づくりのための意見を聞く場、そして官側と地域を繋げるための一手段として継続実施（年1回）。行政・農業・漁業関係者、岩木川流域住民が参加のもと、河川・ダム事業への期待と必要性を聞き取ることが出来る結果となった。また、終了後には、今後の地域づくりの参考とするため、アンケート調査を実施している。

ダムに対する誤解

—平成9年5月8日岩木川出水—

平成9年5月8日の岩木川出水で津軽地域の農作物に大きな被害が発生し、流域住民から「目屋ダムの放流に問題」、「通報連絡体制が不備」などダム管理体制に不満を残す結果となった。

しかし、本出水では①降雨の他に雪解け水の影響が大きかったこと、②かんがい時期を間近にひかえダム水位が高かったことなどの条件が重なったが、目屋ダムは洪水調節に大きな効果を発揮し、決してダムの放流に問題があったわけではない。このようなダムに対する誤解（勘違い）を払拭することも我々にとっては大きな役割であり責務でもある。

第2Step：説明用冊子の改良

—従来型と新規型—

信頼性のある情報を知りたいと願う地域住民のために、津軽ダムでは従来のイメージを主体とした冊子（パンフレット）を一転させ、①現目屋ダムが果たしてきた役割と②目屋ダムに代わる津軽ダムの必要性と役割をアピールし、客観的データや技術的知見に基づき、わかりやすく工夫するとともに、津軽ダム職員が自ら企画・構成するなど全て手作りで作成した。また、この冊子を活用するために、特に地域住民に対して津軽ダム事業の説明会を継続的に実施していく方針を示した。

表－1 冊子の比較

津軽ダム事業概要	名 称：津軽ダム事業概要（平成4年作成） スタイル：A4判、本文13P 項 目：岩木川の概要、ダムの目的・大要・諸元、ダム建設の流れ、水源地对策等 評 価：津軽ダムの概略的な事業内容であり、作成時から既に6年経過しているため、現状が把握出来づらい。情報公開という位置づけでは×	津軽ダムの役割	名 称：津軽ダムの役割（平成10年作成） スタイル：A4判、本文33P 項 目：津軽ダム・岩木川の概要、岩木川の洪水と治水、津軽ダム計画等 評 価：詳細なデータを活用し、治水・利水・環境の面から現目屋ダムの果たしてきた役割と津軽ダムの必要性と役割を主体とし、「なぜダムが必要か」を強調。情報公開という位置づけでは◎
従来型		新規型	

第3Step：直接対話の実施

—説明用冊子を活用—

これまでの社会情勢や地域住民の声を踏まえ、津軽ダムでは説明用冊子を活用した説明会を継続実施。①ダム建設の必要性に対する理解と②ダムに対する誤解の払拭をメインテーマとして地域住民、関係機関、マスコミ等を対象に、職員が直接出向いて、グラフ・図表等を用いて分かり易く説明。また、説明希望があれば事務所職員が直接出向いて説明を行うという地域に対して積極的な姿勢を示してきた。

3. おわりに

以上、これまで当事務所が行ってきたダム事業の情報公開と地域合意形成のための取り組みについて述べてきた。ダム技術という比較的高度な技術を地域の人たちに説明（直接対話）することにより、ダム事業に対する地域住民の合意形成を促進するとともに、説明会を重ねるごとに、当事務所組織への信頼をも得ることが出来たと考えている。また、マスコミに対して特に意識した説明を行うことによって、新聞・テレビを通じて、ダム関連の記事が数多く取り上げられ、地域の人たちへ広く周知出来たものと考えている。

また、説明用冊子『津軽ダムの役割』に関する問い合わせ（説明希望等）も殺到し、地域住民のダム事業に対する関心が徐々にではあるが高まりつつあるとの感触を得ている。これらの取り組みは、ダム事業における情報公開と地域合意形成の一手法として、他の公共事業についても参考になるものと考えている。



写真－1 説明会実施状況